

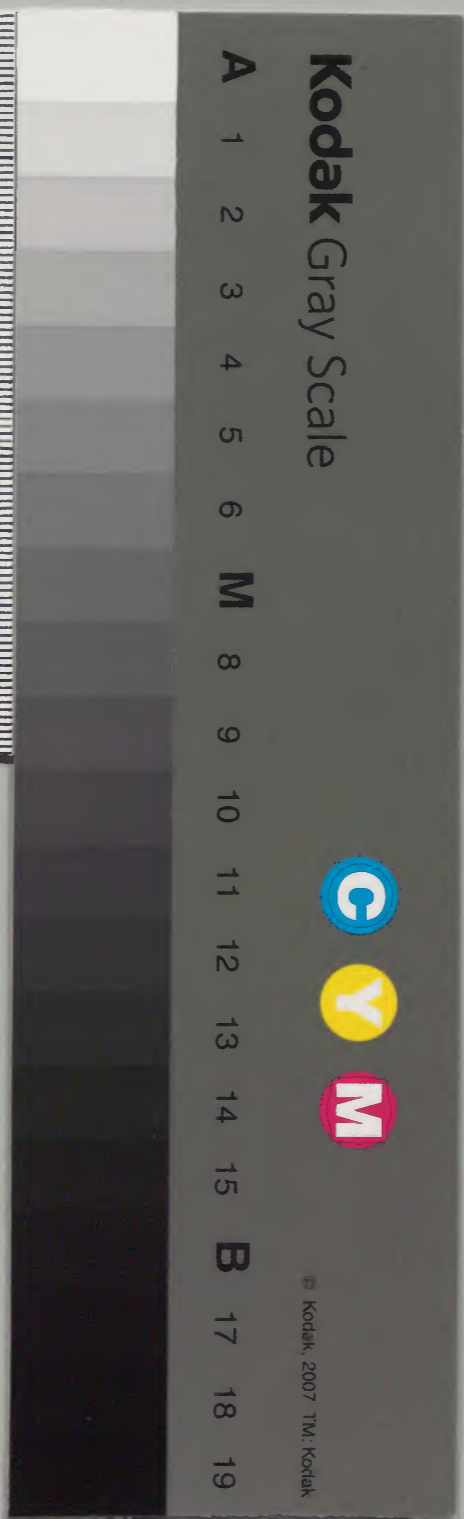
子のあはれ

文庫

和書門	
二七五三〇	號
八九	函
二〇	冊
六	架

内閣文庫	
二七五三〇	號
二〇	冊
一七〇	函
二四	架
和書類	

内閣文庫	
番號	和 27530
冊數	20( 11 )
函號	170 268



方右重元卷第二十一目錄

市原野校臺為源賴信校鷹ノ

頼光朝臣校臺殊戮ノ事

伊吹山出賊校滅事

關白宣旨并伊園洞伏法ノ事

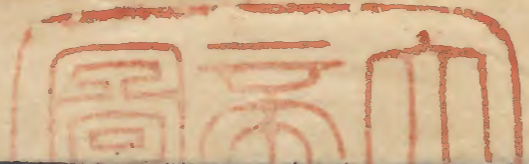


方右重元卷第二十一目錄

新皇記卷第二十一

一 新皇御即位重源親王親政事

正曆六年春三月信實任侍从德道若狭越前紀伊佐賀美濃の  
國より飛脚ありて去はり尋登路紀一々回司に不及制早  
く正勝を給下正勝職作を以て八人氏乃煩不可定作し日々正  
進潔まりりれは信卿愈々あつて在京は武吉小仰り可く可有  
征伐を師將帥の意算を我撰れん人々よ八弟武藏守  
源満政左衛門尉平惟時周防前司源朝親冷泉院判官代源朝作  
を以て授撰出方頼光朝臣八正曆二年の春より肥前守大守を補  
すは九別下つて生やれは此人は我輩宣旨固く不登向つ  
て申すは源頼朝朝臣正勝より八加茂若狭守忠正大宅右衛門  
坂元九郎兼則後友三郎則經加藤大史親孝首友六郎公清を



と始りて之勢都念二子孫孫君使越前と博野所これ西堂に  
 残りて休戦して若後二十日を不る不素く於て澤一野ら被用陣  
 が三月廿七日は東坂中より着れり是より信軍勢并より生捕直  
 よ京都より也山家人等二百餘人を召しきて秋八日吉よ東坂  
 わつて翌日八根中堂大澤寺を介乃堂舎に礼して西坂を  
 下り今度舟行乃前より依り突茂布糸の友社を親花の  
 了同晦日下向乃より進記宗系子惟幕を張り也納りくたけり  
 山傍よりひらく大宅大前光回中より實や人の戸は是より乾  
 り高くと河乃岩密あり彼処は鬼同此と云後童任ありを  
 比敷山より在り大陣坊と云る人乃兒あり一か大物道者術と云  
 びとる色力人の勝を山上山下見は所我老より任とく殺害一  
 短編を燒棄傍所を行初り一山は佛法を破滅せんと企てたり

よ遂よ山代進出され彼岩密を搦人を申よ方一丈計れるわり其  
 上よ坐して帯よ山く乃大天物小天物と修りひ書後佛法破滅の  
 傳を原より一を備園を作ると勇く心は大事なりと云る事  
 是より経進く久む彼岩密山一魁のふるまひ出ありと彼舞の  
 現もるを野ら退治のむとるり此事如何思合作と左より楯  
 してPくもて大なる始一座を軍此我城より可なる朝の象意  
 可有浪流とて伴乃岩密よ向くれり鬼同丸早此事と聞くと彼  
 石よ立踏くと一とよわのりんと約懸りり光回真先よ為進め  
 大音とく何りや鬼同丸此に在り佛はと好者人と鴨すり  
 と聲有り依りて休戦せよ源頼朝長唯今此より向ひ行か  
 と此谷見おせとと叫ぶと向を吃と見遣りれども長七人  
 已乃大童子石の上より飛下り鳴林の音忽ち如くして大宅と目



同治元年...

致く是向光因馬氏系給一推並く但まんと守後臺物と  
 とは次格机と抛んとすくと抛くとと揮合とら加藤後友坂と  
 首友一及よ致と是寄お故な念ら取付とらぶらりのせんを  
 行よ半時中桃合遂よ押へく櫓多り抄て岩室の中を打廻り  
 若堂屋や有んと致搜一々共奔さ者しりりり抄て彼後  
 臺と致よまよく都よ取らぬれを流中れを致致とては  
 立はよい候よ保家の人々ハ何ら御佛計れ化現とて坐すはとや  
 累代武威をよく抛ひ流る希代の癖者と轉く退治ゆふとの  
 哉若一一家より世に世ハウラしを有んよ此一家の武徳は依り  
 民皆安堵れ思とる法と不感と云者り一是らゆくと武功見  
 一進と軍績なくと現も目出と記武將と如ゆ  
 頼光朝臣後臺流残事

同年宣月月上旬頼光朝臣任限充て九州より有上條一が年ハ  
 一とく都よ坐さるると一備よ公よとと一乃事共終く彼方こ  
 一と上勤行ゆハ用事とと一果く四月七日正倉頼光朝臣の  
 許より今日饗應あて一とて山根備あり一程よ即ち彼娘  
 一入河中門の傍に所屋よ臺形ノ恐一けらぬが櫓付とそ有  
 一々何者やんと不審とて座よ着ゆと後子細を尋ねられハ  
 一徳頼臣主事とて昨今夜鞍馬山よ宿侍り一よ云くの事とて  
 一櫓塔と依志伸信の冠王通の敵とらととよいませと進代の宣  
 一肯ハ不蒙一ととと致不慮よいけら作し程よ先櫓並とゆと  
 一作頼光宣ハとらハ彼ハ比叡山よ在く一山よとてわつハ懸一  
 一者と抄はらあり強盛ハ癖者されハ繩緩とてハ僻事ありとん  
 一密く懸とと人ともあり一とハ頼信朝臣実りと同とて致て織の

際をゆく強く戒む人にて鬼同苦く乃堪難さふ是と光  
乃所あるれと憤呼く今よけりひとせんともんは思ひて  
いと病よりなまぬて種く乃饗夜飯ぬ乃獻敵は賓主さふ  
入奥ありてあや痛く更々れむと夜は此中館を病ひぬれ  
連枝録ぬ坐せ中かを殊々睡くて萬國を常は往向ゆる  
時、鞍馬よ可治治と熱てと立ゆれむと天玉乃輩もと夜より  
此中館より召さるる趣りる如く鬼同九何とての板知ん松  
らとくくろの所戦の標を引切く屋の上よ登りて打たるる密は  
天井よ入つて頼光朝臣乃寝所の上よ登りて寝入ぬと待而  
つて光朝臣ハ早中絶よ徹して光朝臣を催るる此屋の上  
より奔る者ありまふ可思と宣くれむと定まらぬ輩ありぬと  
我もくと園より入り鬼同九此音よ響くも夜想りたりとけり

又撥出ては北に走り去るる夜ゆれむ頼光朝臣は天玉成呂  
具一鞍より下りぬ人市原邸とありぬと時牧乃牛多く尋つて  
草食戯せをかりて己こがくは舞廻りたりと見せぬ依の長草  
等傷や牛追拘射よ射く懸るるやせ私語たりと後部南て鳥  
呼の事おはゆひと石物信乃道すくゆりて制一たり受か  
よあぐれ牛の中よ死より牛乃有るると後部何んき思ふらよ  
叩く死よ牛此時松は樹よ見えぬを奔りて思ひて或留く  
能く思ふ小何極中まぬぐとそくをたむ我人の疑りやと尚と  
月と不殺守居よ海よ鬼南より小不流多道をあぐらぬ不  
馴とさあれぬ和人とよゆり死と制しりやと奔らんと思ふ  
ぐらとて可止留りて弓と矢取穿打當ひ強引丁と松つ  
そ夫は死よ牛此右腹よ破せぬとてりよと此牛けくと起上

つゝのぞとるくく腹の中より鬼同様に現出輒く見  
現されし事此の情さしと勿て頼光氏目録くを向ふ言を  
乃面撃破輝者しく無満くくくりけとを援援く進付  
て馬より下し進くをんと飛取りを頼光也とと不務物  
左方を獲く羅沙人首八愛く流りり質ハ尚と不務物と  
権者も廻るを言夫と乃今を流る希代の輝者とい後輝並  
心何の深微とる為人すもを唯命くよ斬やと首十軀と  
微塵ホしと乗るく凡夫撫御敵一人ハ血乳乃所為正史  
此勇より空しくと流る意も修ハ左方乃の事利と坐せ守ハ  
頼光乃の才も可危ハ指との後童一瞬ハ滅されりなりや  
と智勇兼備の良将やと世譽を稱したり

伊吹山凶賊殺滅事

今年春春法圓山神皇御記に世の中終りく満改推時  
程頼光乃の武切に依る巻考以く又同年の秋は初伊吹  
山酒顛童子云者怪く進回を却守是千丈の妖鬼酒顛  
が骨肉を眷属りて大い山の夫持りり一城城波落の行方  
を流し今度又此山に現出せしと極くの汝はありり今乃  
進進夫聴と頼光とては頼光朝標ありり付おれ大由とは頼光  
はふと乃も亦頼光朝標とて汝標出る頼光朝標も毎く  
物流しありし事一頼光在京は武士ハハはく不及進回之法士  
我危くし地あり雲霞乃如く集りり是等ハ大才人ぬる大  
山進發乃兩軍勢催佐ありり鬼神よりなす懼く催佐  
不後一者ともあり頼光宣く今度伊吹山凶賊異  
流布せしとをさゆく事ハ有りり我々先年千丈が獄乃



妖鬼通方変化ありて人怖るる所ありて己の頭を名案  
 あり何れ奇異の事れ可有やとゆくも事ありて大軍を靡  
 中圓の費を治ん事不可然集りて中圓の費以中三命一  
 と残して皆本圓より取らば其蓋ありて破折るも兵皆強  
 ず皆中して我ゆんといふ者一人も無りたり此上はたと右  
 もよして其勢都合二萬餘騎正曆五年八月四日京師より  
 先志契れ舊都より出て出軍勢と配分して二日もの勢を  
 ありて可致ありて比敵山なり烈く湖上は逆浪不静あり  
 也と大将村光朝長二萬二千餘騎を勢田の橋を行渡り東  
 進むるも大も向ふ長男頼朝朝長は後部河内と相具り子  
 大の舟同月七日の早且に後次の際に推寄て遠く山上に  
 石上より敵も兼く相意とありて礼林逆茂本間を  
 引急坂中より檣橋よりひくを渡り射すと其兵二に橋計  
 渡り射を重保られ陣を並へ鼻射りて急急より總一と  
 勢の所乃賊流子みち白く陣ありて皆立ち入勢して騎るの  
 兵ありりりりしく寄り陣を進り固の聲と上とわら山上  
 ありて合也矢射進くありて六隊を度く殺く射り先  
 陣乃兵五百餘騎些と不備隊橋れ板をうつとつと喚叫  
 て表より逆茂本一重引破く檣橋の際に推寄り山上  
 ありと止く打物あり此を当りて支へり寄りと表と  
 入りて甚く是を不殘殺しり賊は元來強者の溢者もせてハ  
 弓馬引れ達者進上り進下され大氏殺して残ひりつと  
 雌雄し不笑して是月也西より順るるも勢重てハ大

雌雄し不笑して是月也西より順るるも勢重てハ大



且つ同時に治平を急ぐに似たりと云ふ相違ありしが治平の勢も  
 源田を根拠馬以相くべき所は今及び軍如常とせんとて賊  
 は多年に戦者共なれど此故に敵所を防戦し不仁目と  
 稱後其を可貴なる敵と知れり其時少々の兵は  
 不為の盜賊兵の集りて須臾に變化して敵に中つて守物謀  
 を可成者共とて不先一交大にり其痛く甚しと唯一速く  
 退く己が力を強登を恃くを一をよ可成然らば高に軍勢  
 は明日ハ徳と陣と不寧敵に此の如くをく其よの城乃藤まで  
 進寄て翌朝大に軍始んずり時頼もより固を發し奮  
 攻より大に其の防支を敵に後迷く度頃共又すれ  
 と捲き攻より行りハ西方一時の勝利と得人事不可廻  
 此旨如何と合休くべきれ源田突く此討むと可有事

若しはさりかぎり大なる相害と遠人事もよりなり上公討  
 八天性思慮短き故に敵より向しんとて打立一日より守越す  
 道は逗留する事と不好何の勢も困道と慮く在申ふ其  
 此事とせんを記乃に計必更不為く作しすきんたを  
 右と計ひゆ人公討よりハ大なるお害より一更しんくも  
 て相圖れ討と可おぬ敵の跡より是より体り好討討よ向ひゆ人  
 此暇尸とわんとすりと後ア立塞く先ハ又酒田敵乃例の持病指  
 發つて安愚を板押ゆかや危云く角より敵を斬く討ひゆ  
 この腹巻くを急ゆゆひも一立綱が志思の如く計ひゆ人  
 云ふゆゆの次其が所存とゆゆりも急ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 せんすゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 居ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

牛角乃軍とて薩城の期可遠とゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 公討より去とゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 にお累と又遠くは老言迂遠の事ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 派よりや智乃傾より偶るゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 たりたり後ア尚ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 不意に討謀一立可おぬゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 流るれ其公討敵と不沙入尚も馬以早ゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 不着ゆゆゆゆゆゆ密に頼國朝はゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 大将ゆゆゆゆゆゆ依依わり即ち公討をゆゆゆゆゆゆゆ  
 謀を好くゆゆゆゆゆゆ勇士乃好すゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 尸系敵乃不意より起く急ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 是ゆゆゆゆゆゆ和敵ゆゆゆゆゆゆ同意ゆゆゆゆゆゆゆ  
 是ゆゆゆゆゆゆ和敵ゆゆゆゆゆゆ同意ゆゆゆゆゆゆゆ

公時最不具氣ハ其ノ上ニ去リテ作ルニ在リ有リ我  
 同クハ後部ト喜ビテハ大ニ相害ノ軍使ヲ可キトシ  
 然レモナリ小船ヲ仕立場付ノ濱ニ横切リ推立クニ  
 又ナリ此使者七月未ノ越ナリ大ニ陣ヲ者小ナリ日乃  
 軍ハ取入リテ可致美ナリ一ツ此道進ニ修ク然レモ  
 一ノ軍以止禁ニ陣有ク然レモ人馬ノ良ニシテ休有リ  
 將ハ然レモ道ニ目以當リ取入リテ打行ニ事ナリ此道  
 人ノ性未ナリ乃チ行ニ樹木森々トシテ大ニ掩ハ刺  
 離トシ道以強ク為深ク自ラ苦澁ナリ一蹄ニ泥ニ東  
 而ト定ムルニハ葉内者ト先ニ去ク城ノ北ニ禁ニ着  
 不リルニ此ハ何故作ルニ夜ニ西ノ上冠ナリ羽果人  
 行ハス一ツ弓杖ニテ睡ト催一甲以槍ナリ一休有



つて爰より大井の陣の中より碓井貞光ハツクめは相尋ふ依て為  
 不胆之陣取く取つ陣をゆる居一ツ去取の曉告り比俄よ  
 嵐烈く吹く候吹山の松老若洲の浪より移て散く吹く  
 一城線波より吹く候一そハ樹をれ勢の廻り一そ例の公内氣  
 早くと相尋と信一寄ふ候一樹を合せよとてそをれ兵  
 三ツの陣を叩き胡縁と吹く候一時と出と我上よりツク方  
 乃陣之先と寄く碓井の陣一樹を依りハ敵の表討入と信  
 樹の勢の廻り一何れもよとて合せよとて二方相尋一  
 萬三子碓井一樹一樹をよれ山岳より相尋ハ湖水より人  
 天化と崩れしすりの碓井西乃相尋一一番の兵を進めれ  
 八部ハ東乃尾より二子又百の兵と陣と寄大御軍ハ陣  
 七子碓井是と旗と進めし山よハ今日ハ痛軍よ寄也

骨より体后より分妙よ夜耳より一樹の急越後敵の寄一とて  
 一のふりてそのれ俄に事の出来と信やふよ城下へと海一より  
 一しやと寄ハ陣一より樹を移し一より寄れといふ一は一とて  
 一近付し敵一あり一行し遠く物具固めち方退し一出  
 向ふ此山系より樹木茂つて行急し不見月人子湖水よ海  
 いと晴夜よりわらわ何れも有敵とて不知何と備とて一と  
 事一とて彼方へ逃ハ此へ走つてなとてあやあり樹の先陣  
 酒田の陣ハ大将の軍より大線所先よ進む行せし方敵の方の  
 何の聲と聞くとまどとて好叶部とて兵共若馬より下りし  
 さらあり自らする乃は取取り恐所建所も煙をよとて奥へ出  
 してより一兵よふまよ乃兵二子碓井山上より着く方一平  
 一の如く有るれとて列あせわ茶備とて一柵打破攻入と後

那が推考り如く敵は可寄といふ可寄は可防兵一  
 人とも暮れしむれ難人系毎火の影に酒打飲兵は  
 せりて並居るは櫓の勢もあはれは方勢もあは  
 て何んかあはれりしは向の聲とせられやどく可不驚或ハ  
 至成地を逃りたり破子と抱きあがり見苦くあり  
 わりしゆかり多りしは酒打飲兵と相續し攻上り白旗  
 三流風と翻して至勢勢合八子に同るし向を逃り賊ハ中よ  
 取勢もあはれ敵はむんとせられしは子の宿軍竹草せん  
 とく至至と懸と支えりゆゑと後より敵と勝んとすむと  
 三洲陣を張くことより下よ落んとす戦んとすりし不計  
 逃んとすりしはむらりハ川に不及た方ハ不得後唯頼とすゆ  
 勢あり宿軍ハ徳と有巻りしは陣を不進取明とせられ

に賊の首領と横物を生捕り見と計をたれとたしと櫓は  
 唯国と作り計ありたはすは後よあはれむくたしは毎ハ藤より  
 櫓の板と突寄り攻上り櫓もあはれ兵ハ山上より馬の鼻と立  
 突入しよ小舟と懸落り入礼切と廻り此よ遊法は遊法生  
 捕り捕りしむる百七千餘人まくと生捕り賊徒念慮と失  
 ひ一蹴あし及むる西の岨れ片なより渡り可逃道とせぬ  
 子大深と谷底へ人類をつらと上り上り重く成ハ己がた刀  
 刀よ貫れあはれハ岩窟と骨と碎れ微塵もあはれ死すりし有  
 月あはれね有はれり勢ていけり大將軍の兵換し櫓より  
 先と突ゆ酒類と可云はれ者ありしは六虜の中と相具せ  
 たりわづと兵八九人も有りと見ゆと大将酒類と作りハ何と  
 かげと落失とぶ付とせり死生の間と可中とせ板とよ尋

好い人をも皆首と低く何とも抑成不言さる可及敷同之  
 松の木子違は傳付く素問りけり娘の程ハ唯う先きさふ分  
 けく更よ不許め身は頼ま血下く月にも流出たりんは線  
 子の罪隠さふ子細を可申とて泣きねじ則繩を解先一々  
 地よ赤う先薬ぞ飲せく尋問をねむねくハ岩岡も表  
 野伏かるとはく作が先年千丈大にえ滅され一何類落木  
 かくさのハ恐りき鬼針りりと人の怖もすに親く人と能う  
 さんがぶふ海原の人のれ滅し娘よと云ハ解りきり實の酒類  
 落木と云鬼ハ廿山よ在りしつとまを在り所との小笠人爲我  
 とくくと地集く召下願よまく鬼針と云威と做つとんて  
 一財實を悔く奪取と云爲世も同冷くくPもさ也作あり  
 一向天下の法教と可和而ねはくハさく作ひしう去れりんは

取圍を不義非及一賊作一、白法も載らるなりされもはら  
 と詐をPやとんと不義りりたを細Pたりハあれり役所の  
 中よ女も筈及集居て誰が存知く尋人きやんとPたりは  
 實くそく召さり共去交行く引立ありたりが岩目録世  
 不類女らふ年以約十七八より女に八歳計までの美女其婦人  
 ちぞ有るり大將軍山子に天皇と名り四々の武士藩、親、  
 ちて重希ふは傍六遣りよハ繩付は鷹妻らやと不知  
 撃さふ中よ引居れん今も命派先さるりんととんと  
 清く唯後よ治病とらと後却進付病てその痛くあげさ  
 そ此等ハ是の虜やその妻子そ有るれば大將軍より  
 尋問令も許あり真直よPゆらむ命ハ後アガP賜く  
 ゆんて一坊あくもわは作とPもて想月と可意とPくれ

一人の女流を押しこめ、薄情の事と仰せ作者は叔父二人  
と虜の妻子とて、この作は然ぬ中として引致す所のハ親子の  
思愛をいと不気情とて、遍みられ有とありぬ、詐とくま人  
此山よ鬼社に似て、所為をり、わらわらとわらわら、つと  
男をが、我書よ、喜しく、戯も興で、面白くぬ、酒宴よ、日と暮る  
心ゆくぬ、夜更の花よ、夜と命、子、此、上よ、懐もそ、討ちの  
心使れ、了と、神、新つ、佛、願ひく、憂よ、月日と、暮、海、渡  
今まも、余、不、不、笑、一、よ、存、在、り、一、甲、斐、わ、り、そ、階、時、暮  
一、逢、進、す、り、の、秘、さ、ま、よ、と、わ、る、人、ハ、同、是、方、ハ、そ、れ、無、  
郷、乃、何、某、れ、始、何、某、乃、書、り、喜、も、公、乃、小、惠、り、て、金、と、も、助、也  
親子夫婦の對面を、と、と、毎、所、な、れ、り、と、亦、錄、人、の、女、房、皆  
も、公、合、せ、く、同、も、う、ら、う、と、呪、く、口、親、り、大、將、軍、と、存、め、り、也

武志心も、と、恨、ま、家、と、權、れ、權、の、社、と  
て、佛、さ、り、此、上、ハ、と、再、度、の、礼、明、也、不、及、白、州、乃、越、相、違、な、く  
源頼朝、子、と、考、く、ハ、二、高、の、傳、り、は、く、有、一、六、初、て、九、人、の、後、也  
そ、外、乃、虜、百、卒、終、人、ハ、向、さ、引、也、目、出、さ、上、高、一、妙、ひ、り、り  
所、因、も、く、女、皆、放、解、よ、送、り、也、一、妙、ひ、な、れ、也、死、さ、は、人、を、懸、り  
と、は、ん、流、と、源、家、ハ、民、の、美、母、り、や、流、落、り、て、喜、合、り

剛白宣言并 倭国相伝の傳の事

今年ハ世乃申、隆、り、一、に、結、る、乃、武、功、ハ、佛、く、不、及、大、礼、那、賊  
遠、く、賊、果、く、世、と、夷、け、く、年、と、言、ぬ、改、正、乃、年、と、改、り、て、因、也  
そ、れ、ハ、公、元、治、政、と、急、く、所、遂、と、世、流、く、萬、修、養、ト、う、一、中  
け、亦、去、年、と、り、と、勝、つ、と、世、乃、申、隆、一、く、が、ら、く、と、此、事、乃  
と、あ、ら、う、ん、と、し、將、と、也、程、よ、ハ、長、閑、な、れ、人、も、希、り、年、号

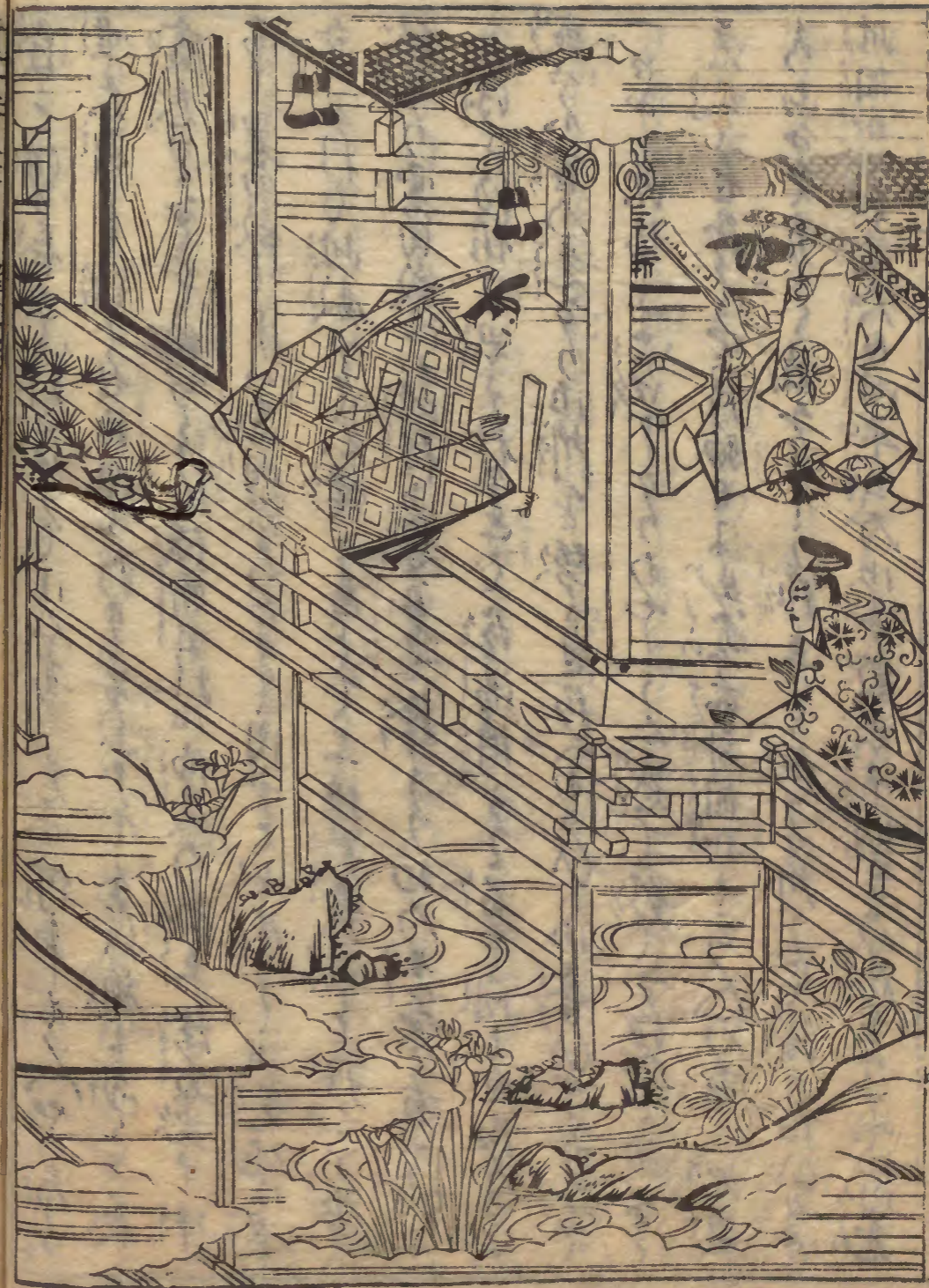
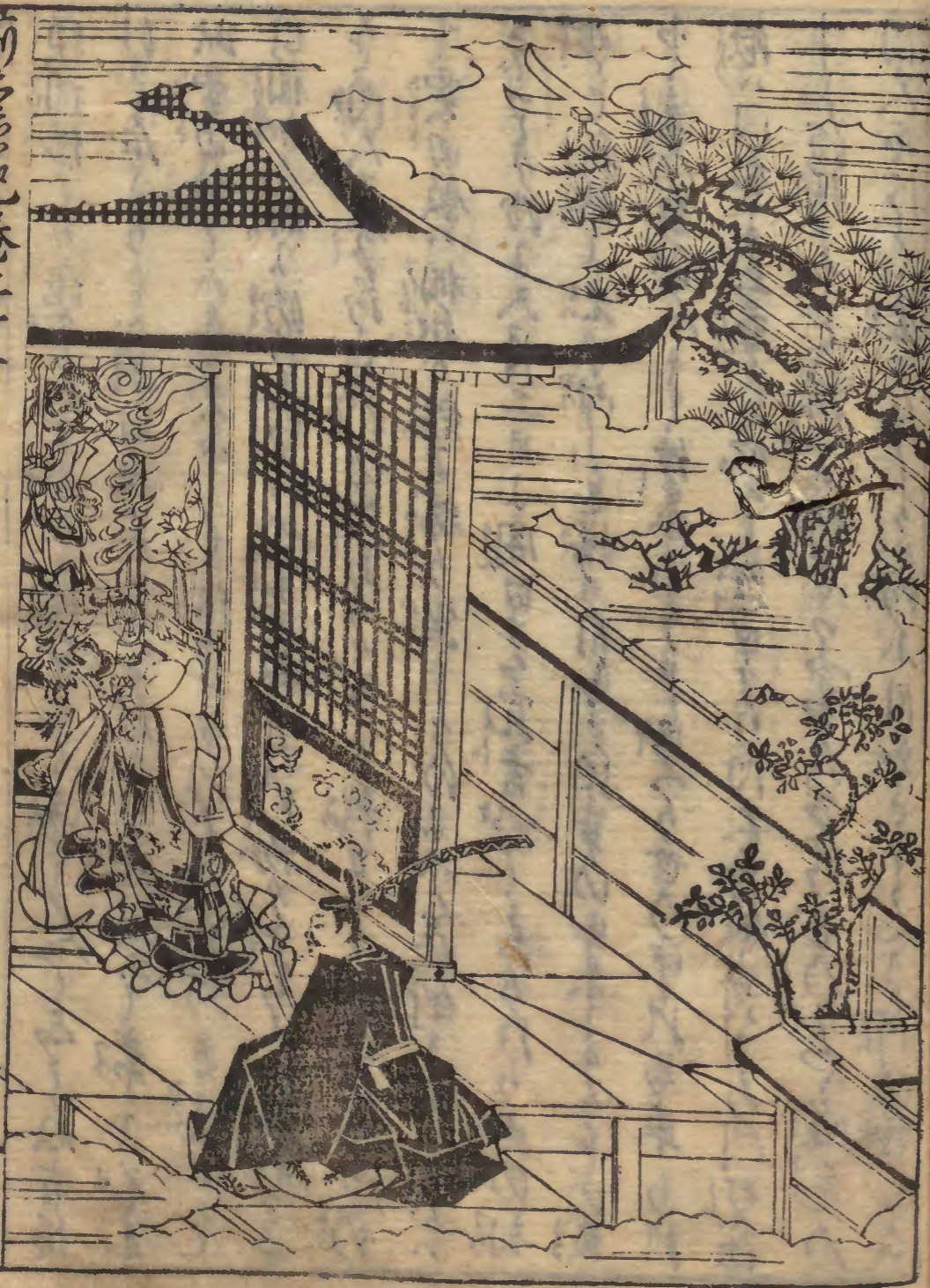




山井殿大納言あまのいづのふり所を依周八内大臣よいしゅうより所へ今年又  
 遣り宣旨下つたれども今ハ秋ありと趣はく申所子と喜  
 所の本不斜すかりて開白ひらの海うみ公こうに最重ももぢとて日月六日にちがつ出いる  
 世の裏うらも小悲こひり事ことも名なも一ひと惑まどり北きたの西方せいほうも若わきをす  
 藤ふじ一ひと所ところひねつたて竟つて同月十日乃海入道殿かいにりだう當年としどし三さんとて去いり  
 づ正門せいもん乃の上かみ座ざ部ぶ集ありつてハ悲あはれたる所あり理ことわりありす  
 たり内大臣殿ないだじんの所ところ取とり又また開白ひら殿だんの病びょう乃の間まとて宣旨せんしあり  
 了しと所ところの海うみ唯ただ我われの政まつりごととてらやとあり所ところを立たて  
 探たり所ところを遣まつた思おもはたさばと事ことあり代かり萬まんの事こと初はり  
 自みづかりて先まに思おもはたさばと事ことありと傾かくPの人ひとも多おく  
 くり若わかるとも其その依周よいしゅう何なにかとて開白ひら職しやくををり通とほり  
 其その山やま折わかれ二ふた位ゐの位ゐり所ところを遣まつた思おもはたさばと事ことありと傾かくPの人ひとも多おく

敷せと所ところを思おもはたさばと事ことありと傾かくPの人ひとも多おく  
 唯ただ天道てんたうとて遣まつた思おもはたさばと事ことありと傾かくPの人ひとも多おく  
 晝ひる忘わすれとて遣まつた思おもはたさばと事ことありと傾かくPの人ひとも多おく  
 乃の栗栗回まわり殿だんも一ひとハ高たか村むらた大だい長ちやうとて内うちかと女め院ゐんとて山やま定ぢやう化げも異い  
 ありそれと此この殿だんとてハ憎にくみとて二ふた位ゐの位ゐり所ところを遣まつた思おもはたさばと事ことありと傾かくPの人ひとも多おく  
 初はり栗栗回まわり殿だんハ此この行ゆひ夢ゆめ身みと遣まつた思おもはたさばと事ことありと傾かくPの人ひとも多おく  
 と遣まつた思おもはたさばと事ことありと傾かくPの人ひとも多おく  
 或あるハ不ふ吉きちの思おもはたさばと事ことありと傾かくPの人ひとも多おく  
 一口ひとくち中なかの思おもはたさばと事ことありと傾かくPの人ひとも多おく  
 是こゝろ来きたる所ところと日月晦日にちげつごうじつト生なる所ところ相あ如ごとく云いふ人ひと乃の亦また也なり遺い遺い  
 乃の山やま中なかや有ありく最もをうう作つくる所ところと遣まつた思おもはたさばと事ことありと傾かくPの人ひとも多おく  
 此この相あ如ごとくハ流なが流なが大だい長ちやう村むら公こう乃の所ところ子こ敷せ中なか納な言ごん乃の後あとあり又またの内うち感かん

新編御記卷三十一  
 廿六



須相倍り地下人よぬく後すも漢人々々ありぬ有候  
 しく居り一が岡白殿と云はれり此の御事少く常よ不案  
 此粟田殿と八年來中より侍りて今更乃方遠よも  
 け相殿が館よ渡りて後乃人粟田殿よハ砂物をもて中懐あり  
 を心大に懐あり候の御事ありと相りてハ砂物あり  
 て粟田殿ハ相殿が館よ移り坐す候よハ人此例と御事あり  
 さつり候よ又月二日は岡白殿宣旨ゆく事あり主の相  
 也と我館よ坐す所と御事あり此事の出立より候の御  
 少く喜ぶ思ひ人々侍奉す候事あり世乃申れ馬車あり  
 浪ハ門前よ立寄り候御事あり此の御事ありハ門前  
 一ハ御事あり候事ありハ事ハ事あり候事ありハ事あり  
 門大に候り候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり

岡白殿人知れ候事と何れ候事と此の御事あり候事あり  
 不候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり  
 乃大事あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり  
 候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり  
 易く候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり  
 岡白殿の御事あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり  
 女流あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり  
 人候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり  
 内斗あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり  
 も存在あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり  
 候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり  
 らせ候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり候事あり

かく腐れ袂をあらりたり内大臣殿斗し仕仰り嬉しく  
今日八宣旨乃ちりやん時白八開白は補任せりや  
ひり又思乃ちり月土日たる道長天下及び百官  
云宣旨下つて開白は又宣旨人さし有依りて  
つら志再かて寄りて也所のいささなれ年  
し喜ひより内大臣殿ハ新りもと事と今世不在  
有ぬ事なり二佐野殿を極く進進せ唯七八日  
ハやや侍り候し坐すも心命を不持り候事  
そん老は所世は候人限ハ新りうとせざる  
極く是より此の向後養子りて去りて思  
此横保くそ坐りたり雲殿は此開白殿俱  
有ハ為情く呪咀し候事編執乃極く後  
後

新古記才二十二日録

花山院通江の殿  
宮兵衛於侯周宅事付本情候事  
侯周隆家配下候事  
中文所聲中候事  
備要入道悲逝候事

花山院通曰君降事

一條大政大臣為光公の孫の正曆三年六月十六日夢一  
 以桐槨公よ封一恒徳公と造一男公建六人女君建八人  
 一 皇後中少二乃皇恒子して花山院即位の何女  
 一 如く弘徽殿坐出下が程く先皇の院を出家ありし  
 一 此如く先皇の二乃皇震殿上とあり又如く皇孫  
 一 四乃皇五女也亦方とあり降く心し形を止事と藤原  
 一 一とあり皇女唯唯とあり又か冊とあり大  
 一 后失所く鷹司殿とあり女君建を任所とあり坐一乃皇  
 一 侯用公ハ善悪とあり坐一乃皇ハ年ハ一乃皇ニ二乃皇若  
 一 一乃皇親整とあり淨也小世乃皇事し何ありなり此乃皇と

八年未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも...  
八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも...  
八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも...  
八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも...  
八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも...  
八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも...  
八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも...  
八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも...  
八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも...  
八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも... 八平未の中らひ少くも...

人を見惚... 人を見惚... 人を見惚...  
人を見惚... 人を見惚... 人を見惚...  
人を見惚... 人を見惚... 人を見惚...  
人を見惚... 人を見惚... 人を見惚...  
人を見惚... 人を見惚... 人を見惚...  
人を見惚... 人を見惚... 人を見惚...  
人を見惚... 人を見惚... 人を見惚...  
人を見惚... 人を見惚... 人を見惚...  
人を見惚... 人を見惚... 人を見惚...  
人を見惚... 人を見惚... 人を見惚...  
人を見惚... 人を見惚... 人を見惚...





少仰出されつべしと云ふ事起つるは  
其の如く空受はは日代の山鹿よりして  
其れの内少殿下少也合付く小塚の事  
は早世の隠もろそ大方願志人の台號ハ  
官兵團於佐周宅事付本情詣る

然つて後日大臣の御事よりして  
此大臣の呪咀  
所病と云ひ又大臣の御事よりして  
何れに事ありてし行事れり  
て作らば此年未調伏の力  
事の際に入らり約てハ

其の如く空受はは日代  
其れの内少殿下少也合付く小塚の事  
は早世の隠もろそ大方願志人の台號ハ  
官兵團於佐周宅事付本情詣る  
然つて後日大臣の御事よりして  
此大臣の呪咀  
所病と云ひ又大臣の御事よりして  
何れに事ありてし行事れり  
て作らば此年未調伏の力  
事の際に入らり約てハ  
其の如く空受はは日代  
其れの内少殿下少也合付く小塚の事  
は早世の隠もろそ大方願志人の台號ハ  
官兵團於佐周宅事付本情詣る  
然つて後日大臣の御事よりして  
此大臣の呪咀  
所病と云ひ又大臣の御事よりして  
何れに事ありてし行事れり  
て作らば此年未調伏の力  
事の際に入らり約てハ

新編歴史卷三十二

つれづれと驚きおぼしめしあはれりしに... 順道順をせしめしと... 順道順をせしめしと... 順道順をせしめしと... 順道順をせしめしと...

長教の臣神を祀らざる所... 唯は日守とて... 唯は日守とて... 唯は日守とて... 唯は日守とて...

不い入りく来きつるりと明あき順ゆ究く竟きやう乃の事ことなりと思おもひの大おほ長なが殿どのと秘ひ  
 づけ奉たまつて女むすめよ作つくつて宣のたま旨しめが家け一いつ綱つな代しろ車くるまよ家けせまりを志し基もと  
 が書か唯ただ今いまゆりをりとの先まうてさり也なりとり體ていとり遣つか出だす  
 檢けん非ひ違ちが使し共とも何なにもの心こころハハ云いふ事なりと發はつたれば也なり印しるしく雷  
 一ひと車くるま乃の其その指さし女むすめも不ふ違ちがならば打う領りやう許もとては通とほりなり  
 明あき順ゆハハ又また所ところも跡あとより出でく五ご條じやう京きやう終しゆうとり西さい河かより先まり車くるまと  
 止とりて明あき順ゆ我われ馬うまよ家け進しんせきとり急いそぐり終しゆうよ先まの表うらの越こ過へて本もと  
 情なさけも著あるり月つきも稍しやう山さん乃の肩かたよ現げんまはたし間まはは濃の本もと先まと指さすべし  
 て氣き疎そ山さん乃の分ぶん行ゆきハハ立たちますべ分ぶん卒そつ塔たつ塔たつ塔たつの中なかより去い年ねんの此こゝ比ぢ乃の  
 ままりならば也なりとり白しろうや也なり見み之のくり帥しゆう殿どのハハ中ちゆう殿どのよりいひてえ  
 とり自みづからの為ため所ところ業わざとりハハ赤あかあらるり任まりし都みやこと雜まさあるり世よ界かにおけ  
 とりれば也なり悲かなの心腹はらとり定さだまりてはいまらば何なに地ぢへもあらずし今いま也なりの中なか



若くは小業をせむと只さく作へども亡の儀ありぬおとよ  
 せく坊代よ多と流しゆりしれ薄情さ中細玄し同く形は沈め  
 少く同好ゆやあつた方く選つ難く悲しき珠の中宮の月  
 粘りし有るぬゆ才少く坐すと見果得ぬと法儀く受く作  
 内産平うやくまれば法よりしゆ才難き守守つ奉るせゆ久又樹く  
 し賢れ公乃れん少く女院乃れ夢をばや又久奉るせゆく我此  
 才を科より久くは例も思くを奉るせゆくをどせしり人し宣ふ如  
 く撥は流しゆつ流し階坐しより素より可人聞所かゆ移り  
 明順く聲とよく泣き流し糸幸小懸り山中乃禽歎く音と合を  
 て鳴りりハ我憂と泣くやといし間ど隔りたり又大勢の有われ  
 く是より真し山節は流しゆんそ山越し出く河をとより  
 紅の森より西を指くると早ゆゆ人を通最速なり雲の方より  
 又乾かぬよとぬき流し行よ北野に指著ゆくと鶏の聲し聲し  
 少く早的進りて黄敷よ素り泣く初中きせゆりハ性昌泰乃ん  
 げくは後乃の憂よ受合比ぐ今一度法乃と備りゆ久  
 と深く祈誓し坐し首行よ案よ取てゆりぬ宮人とも見え  
 憐れんと神和と物ゆか此形勢少く晝の中よゆりゆりゆ  
 一人目包すく又公乃の憤り影薄く如何ハ人ともぞ了感さ  
 明順是程よ波出難き所と物と思ひ立ゆ人方とて指ゆ久  
 ずじくくぬせゆひ悲しき目をぬゆん女人事もゆりゆせゆん  
 是より何より山より入つて出家の體よと悲坐せりとすされゆ  
 心川殿才く不教ありゆ事宣ふ者我何よりとるゆ事と  
 そりて普夫乃下ゆ何れより才と可隠所や有る唯鬼と角  
 を運よ任すゆゆとそ右進馬場と暫たり長日の方よりと

新編源氏物語卷之二十一

ゆくと坐一なり

伊周邊家赴配所事

初て所よハ檢非違使ども初も知して兵乃昭作平出坐  
 進めまの也車指寄之れハ帥殿ハ不坐く密一移上周章  
 迷ひ上を不へと母一ツ天井の上塗籠の中まで移る限  
 多搜一初より内少甚運繕ありて一立見之不取ハ餘  
 女力人の可殺飛うはく有一移ハ檢非違使命余一移く  
 都の中ハ難も活すハ必立出家一移ハさんとて密中浴外  
 去幸院傍所を去分て我尋多移り一移ハ日圓の刺汁  
 一弊ハ綱代車ハ供人二三人一と出ル官人等何の車ごと  
 怪ハ初ハ心大に殿本情ハ消ハさゆ今海ハ也活らとて門  
 初ハ車留之れハ帥殿以て下り活ら檢非違使等見之と見  
 息を絶穴嬉ハ命生延らると喜合移て此中と奉守取リ  
 了れどと夜ハ檢守ハ明日卯乃刺中宣旨下ハ檢非違使  
 等始ハ懲て移ハ密で堂上ハ移移守ハ移移移移移移  
 なるめハ今ハ限ハ移移母北方ハ中宮ハ限ハ移移移移  
 くり一移ハ坐一ハ移移を檢非違使皆直ハ見進ハ移移  
 とくハ限ハ移ハ中宮ハ移移を引移ハ進ハ帥殿と引移  
 慈張ハ車ハ抛ハ移移也進ハ移移痛ハ移移同ハ移移有移移  
 以子移移とハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移  
 殿を何ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移  
 やハ移ハ移ハ母北方ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移  
 と引下ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移  
 ちハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移

初て所よハ檢非違使ども初も知して兵乃昭作平出坐  
 進めまの也車指寄之れハ帥殿ハ不坐く密一移上周章  
 迷ひ上を不へと母一ツ天井の上塗籠の中まで移る限  
 多搜一初より内少甚運繕ありて一立見之不取ハ餘  
 女力人の可殺飛うはく有一移ハ檢非違使命余一移く  
 都の中ハ難も活すハ必立出家一移ハさんとて密中浴外  
 去幸院傍所を去分て我尋多移り一移ハ日圓の刺汁  
 一弊ハ綱代車ハ供人二三人一と出ル官人等何の車ごと  
 怪ハ初ハ心大に殿本情ハ消ハさゆ今海ハ也活らとて門  
 初ハ車留之れハ帥殿以て下り活ら檢非違使等見之と見  
 息を絶穴嬉ハ命生延らると喜合移て此中と奉守取リ  
 了れどと夜ハ檢守ハ明日卯乃刺中宣旨下ハ檢非違使  
 等始ハ懲て移ハ密で堂上ハ移移守ハ移移移移移移  
 なるめハ今ハ限ハ移移母北方ハ中宮ハ限ハ移移移移  
 くり一移ハ坐一ハ移移を檢非違使皆直ハ見進ハ移移  
 とくハ限ハ移ハ中宮ハ移移を引移ハ進ハ帥殿と引移  
 慈張ハ車ハ抛ハ移移也進ハ移移痛ハ移移同ハ移移有移移  
 以子移移とハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移  
 殿を何ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移  
 やハ移ハ移ハ母北方ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移  
 と引下ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移  
 ちハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ移

送<sup>り</sup>進<sup>ま</sup>さ<sup>せ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>御<sup>上</sup>宣<sup>ひ</sup>道<sup>を</sup>行<sup>は</sup>松<sup>津</sup>守<sup>を</sup>基<sup>に</sup>日<sup>を</sup>  
て可<sup>き</sup>送<sup>り</sup>進<sup>ま</sup>さ<sup>せ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>此<sup>の</sup>母<sup>は</sup>北<sup>方</sup>ハ我<sup>の</sup>相<sup>見</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>廿<sup>二</sup>乃<sup>は</sup>姉<sup>と</sup>あり  
々<sup>々</sup>と<sup>し</sup>痛<sup>く</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>我<sup>の</sup>任<sup>じ</sup>日<sup>は</sup>罪<sup>科</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>後<sup>は</sup>日<sup>を</sup>  
戦<sup>ひ</sup>の<sup>後</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
年<sup>は</sup>四<sup>月</sup>廿<sup>二</sup>日<sup>に</sup>御<sup>上</sup>宣<sup>ひ</sup>候<sup>へ</sup>御<sup>上</sup>宣<sup>ひ</sup>候<sup>へ</sup>御<sup>上</sup>宣<sup>ひ</sup>候<sup>へ</sup>御<sup>上</sup>宣<sup>ひ</sup>候<sup>へ</sup>  
殿<sup>は</sup>出<sup>立</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
車<sup>の</sup>音<sup>も</sup>早<sup>く</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
落<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
そ<sup>の</sup>日<sup>は</sup>直<sup>に</sup>大<sup>門</sup>に<sup>入</sup>り<sup>候</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
を<sup>急</sup>ぐ<sup>と</sup>し<sup>候</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
便<sup>に</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
賜<sup>は</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>

暇<sup>な</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
あ<sup>ら</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
稀<sup>に</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
聲<sup>と</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
ら<sup>せ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
て<sup>急</sup>ぐ<sup>と</sup>し<sup>候</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
を<sup>急</sup>ぐ<sup>と</sup>し<sup>候</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
され<sup>り</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
と<sup>急</sup>ぐ<sup>と</sup>し<sup>候</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
と<sup>急</sup>ぐ<sup>と</sup>し<sup>候</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
一<sup>度</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>  
床<sup>に</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>候<sup>へ</sup>

憂去氏大乃山と云りおづいせと深くし入る我力くれ  
 やると思ゆるをさきおく申宮より奉るとはせよ賜ふ所まは  
 今夜此旅亭より宿直を奉る人ともなれども明日乃引かるは  
 可悲早く可成上とて罵るせぬ今ハ力きて山女賜り候  
 ふんとて出たるが固く更道へ不意なる將書きて車音の  
 別今此我身よ在とも歎きさる隆寂卿ハ知らぬ山落よると  
 濁く入れりや御心懣憤ゆせや乃露々く是れは事一  
 少とてハ都乃外より旅夜せ先落情を分けに苦まくる  
 候て日投と辱く物まよ下り着候より小公の由之よ  
 つ外より指進と懇まはりたり路のたまりて送り進せし  
 村近客とら若都より向うとんとりたりいと細けり  
 内形勢乃ん若くさ具て下りて我子に友助と云者と強て  
 徳ゆきの後人といひ至我力汁よりなり申殿ハ本日山崎開  
 きて下着候と候よん比慥きう坐しなれど城で云れいと  
 都子奏りなれど増く体へ速よ平下母ハ歎きさる事な  
 しては何やすすし誘へて過し可上との宣旨下りたりは  
 使母母北方に懸すし上を進せし為作らさるハ中宮乃  
 切な依り依り女院乃内計せして申殿ハ掃塵よ中細  
 但馬より留先可下りて宣旨下つねと減しやうと  
 圓を押へてハ安延道に候る罷留りたる事乃尋らさ又強  
 深き料とてしゆる糸ハさりやと召返さゆ事とゆるん  
 何までと由餘岐ハ盡ゆとあくる作らば候ハ慰めゆふ

輪書後記卷三十二

新編 源氏物語

十一

於稍取付けり杖をぞ致されたるゆへ車も助をせまひて  
同座流しり都を送り上りたり脚殿ハ引遠て車西より別と  
候の陣より候して候は仕くは人許され果何と鳴尾武  
庫山くけく月引れ播磨乃澳と云はれり此ハ御公乃浦と云

物ごよんの中一崎をねぞめなれ浦し中髪ありたり  
いづや世乃是ゆりやかく我んや憎く是れたり洛家郷の異方  
（坐す）と妻ての同ドがよ有ゆりしと生憎りの世と心憂是れ

方くふ別を身はと似るゆふゆふと須磨とたの浦に  
とと是れはゆりや海乃事やととと云ふ聚めゆりれと暮  
ふと人一人の供ありりりて皆書留ふはしわらば云はれり

ゆ中より候て配所より看ゆり大宰大貳有田朝臣の役  
うして市迎はせられり此有田ハ朝臣と云ふ事ありり  
不圖了故面白道海公乃ゆりて昔こ浅儀くを宮しとちをせはひ

しとと又去年秋より大貳ありて宰府小衣よりたれハ  
昔乃心憂りし有田が恥づりしゆゆり事ありし世守今ハ  
由有候も最儀遠くも最情くれとて公家乃由授りりも先進

て仕つりり脚殿ハ朝と云はれり亦恥づりり是れは  
し有田が子よ美成と云ふ者代常より伽中を進せつ萬よ  
ん付く仕つりやとて妻てハ愁ゆ端と云ふ成よりゆりて都と

中宮の唯少し坐せぬゆのよ又旧款見ゆゆりてはゆり  
とゆりて振くも愁めゆりてはゆりては唯打身ての坐しは  
遙くは有候と云ふ遣て

雲乃波燈ゆりては満て遠るん事乃ゆりゆりなゆり  
中獨りゆり母北方へ去りてはゆりてはゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり





兵乃都中... 子と急行と帝明...  
於て月日と推後... 母きと方悲...  
八限... 清眼阿爾...  
了行療... 心遣進...  
多... 卿朕...  
雜... 難... 難... 難...

欽深慈切東... 代有制之恩...  
家仕於一朝... 貴初倫十六...  
家... 君忽忘惠...  
之過也不... 望早背病...  
果何必焦... 程之不...  
為羽翼之... 類逆鱗之...

類逆鱗之... 類逆鱗之... 類逆鱗之...

恩殊垂矜恤早賜官符被聽歸京將訪晨昏於不旬  
之老母今治疾痾於二世之名醫矣隆家誠惶誠恐  
謹言

從三位出雲權守藤原朝臣 隆家 謹言

長徳二年十月七日

右大臣啟

少を被書す此伏若遠敷聞るに宿免乃由沙汰十有べり  
早と早昨日母北京先少の六内院あり不及中ふ乃所未終  
配所の床に起外ふ年月ときひ移ひる

中宮御産直御事付 任周隆家御書

年しきまき長徳三年一歳ぬ去年の冬中宮御産平く  
女宮誕生坐たりされし兄の勲系乃流刑と怒り年未接と

長くれし梳髪し髪と愛うて切髪ひ移り利髪しゆんも  
立たれやも長そへ由産ありては本まさと遠きせありし  
女流少と一向し留めをせ移り後よを儘よて坐りる由産の  
し之より勅許す尚素の由ありし心愛し縁引し日し後を愛  
方しとせ病かりは今年に春又由懐妊を方し移り若皇子  
あく由産を如何し目知るんしと方振るぬ人まてり勇  
まらばよ二月末方し如く由例格や不坐由由怪かると  
能く取入く最苦し若小坐りる間法行し宿幣使と被立依  
非小仰せく由産を病られり法家の名醫良薬を盡し有  
験の由傍紐法を修して病苦平愈の術変成男子の法世に在  
限の事やと可くて物所をく行書せ移りれ其に後  
不坐いし由身若く物乃應し暮るるに由りれり

てハ如の世々... 敷く... 此人... 則奏... 官府... 勇... 順... 忠... 思... 有...

兼資... 村上帝... 来此... 何... 思... 有... 又... 人... 所... 姑...

と云瘡物もく老若上下是と病或ハ往々中ら死將云有る  
 夕夕脚殿く死例伍少やわ守夜熱志と最惚くりなれん  
 若此瘡少く有りハ遠く海路を度く上りぬ人幸しき来  
 ちけきと熱醒くとも出来ぬわ又なれそ大貳有回中と強よ返  
 先ト多れと増く猶縁わりて八月上旬は博女ハ津より船出  
 都乃方へと廻り行去年見く浦く山くも更上親との終り  
 如くはく深所く奥のりぬ日枝と重く十月和都より上り着  
 所上住棄し水船よ入所へと掛し伊美ト切り殿舎音より  
 哀し荒果座少の草生着て林ハ慶よ嘆もろく山麓乃本氏の  
 系よ破く人住へくわぬよ小方松志と居先進せ年来  
 君長治より女房中て得るは得しよ小穴目物と令せられんそ  
 満つ悦中と逐れれと喜位は遠かりよ来し事共互よ治少治

ひ悲しきと戀しきと取聚し中や松君乃がやけけを世境  
 すりふぞ今までい憂ハ皆忘し義多れ事や也宣ふゆ人々乃  
 笑路ハ声ハ始く出り配所よ坐り中と此山事のと殊よ志  
 しく如何とせぬハ先此松と早晚ハ見せん生松系とのそ  
 一推治より一年餘の行よ長しとく如治れむ脚殿  
 後茅生し荒よなれし故脚の松ハ本多く有りけるれ  
 新治れ生し松系生て来く高直都と見くぞ怒き  
 と宣ひなれむ小方  
 昔村の生れ松系生を乃くなれずわぬん死可くか  
 此喜乃申中や母少方れ此世少て坐して活る喜少く遠所く事  
 を返くし能き早き月来よ成り行よ山墓よ備て給んんそ  
 脚殿中納を殿信其よ標本よ志後治より山異脚のやと

新古今和歌集卷二十一



新古今和歌集卷二十一

わろふ進むくは病の起し我不孝此科少をといふ悲  
そて同よ弱き所へ河へて雲の降るよ中細言友

師の

病ごり白ひ留めて教ふる様がなと見ろそ悲し

採とて降る法名とわくはわと神ぞ降るよりなり  
ころが哀よ空しく空しく泣くゆりあがり

満交入道薨逝の事

及田新發意満慶入石今年八十六そ坐せしが老病日長より迫り  
最軽かくんは所の終よ公邊ハ下よ不及從親家人を懐念と志を  
葉緋ぬと憂うつ極く看病志よりりりりか更よそ除く人少くまう  
さゆぐ苦いげや極よと見しは唯眠る如くして打臥ての  
坐りたり至上條をば皇山花と詠む髪を思合て月よは勅向あり

りの惣じて在系乃武士徳圓上人名門前市と如く是例の傍と  
所進守或時満慶人よ向く真の身ハ紙五年奉云乃志勅よ傍  
厚く誇朝思家富門族豊ありてまうと我身八十餘歳乃上壽を  
おら今生の榮耀己ま極りれ今傍よ命盡んとは没初明は日小  
中より維然一盡乃神ハ此廟室の留て必弓矢成守りへ又高  
院を吟動をのくは代天下安危の兆と人ハ此紙藝をりて宣  
ひくはて別殿に入給ひの意よ法乃要品を唱人吟法の時意と  
我の半々より公達世家人海を押し入り此花を不離作しひるる所  
ら誓あの時日女ハ不達長生三年八月廿七日終よ薨逝了給  
り人々の悲歎よ不達嗚呼可憐ハ生涯終了乃忠義の意  
一毎度宸襟を奉体武威の信守海よ遠く志久と上よはくさ  
愛と施下よ寛仁大友乃名將とて兼在村上冷泉圓融花山又代

名聖朝之奉仕一倭歌管絃乃達人也  
 武能松澤長俊信濃縣赤松藩奥修練等八箇回と授任して  
 鎮守府御軍に補せし晩年及ぶ祝言を後乃世の勲業と  
 善乃妙一智勇親備し如く嘆息餘五半にけり目知る事の  
 之多かりし其志令既多き梅檀乃隠し居りうバ  
 悠々養育と石櫃了然めは華三睦院乃備り墳墓を築き葬  
 りたりし心遣誠不遠して同此廟修勤して天啓を祈り如かり  
 則天延年中より自彌加し如く本係乃而影法師華三睦院よ安  
 寧に造言を任せり南院と廟所寺と改め教養作善苦少也  
 後修り

新編御紀卷二十二



